



禿頭姫

間宮緑

Mamiya Midori

七色の泥。儂い瞼。睫毛の先。白い鼻。明け方の、れたす畑で青虫たちが生まれ出る。一基の香炉。膨らむつぼみ。照りつける日。細く紅を差した唇。息をつき、ほんのり覗く白い歯の先。暗い口腔。飛び立つ蝶々。たなびく煙。萎れ花。月は落ちて星は霞み、青々と夜は昇って道に日が差す、枝に影散る、風が吹いて鳥が鳴く、雲は色をきらめかす。都の西の古邸の二十畳間の寢室で、甲の姫君はすやすやと眠り、瞼を閉じて、薄く開いた口の奥からかすかな寝息が洩れている。家従の働く朝の邸でただひとり眠れる娘、安らかなる寝顔の甲の姫君も、いずれは目覚めて鏡を覗く。淡い夢を吹き消す如く瞼を見開き悲鳴を上げる。ただのひとりも気づかない。あわれ甲姫の黒髪は跡形もなく消え失せり。

甲姫は見る、寢室の果ての片隅の狭い板床の襖を。薄気味悪く思われて覗いたことがない、その奥の座敷には一人の侍女が棲んでいる。近寄り、崩れるように坐り、縋る気持ちで襖障子の引き手に手をかけて、声をかけるのも忘れて五寸ほど引く。滑りの悪い音がして正午の光が洩れる。襖障子の隙間から差し込んだ両手をあてて思いきり開くと、形ばかりの床の間と押入のほかに古簞笥しかない六畳の間に、箸をつけたかつけないかの雑炊の膳を前にして、藍染めの気品ある上衣を着て、一人坐る女の物寂しげな烏髪。明かり障子の隙間からうららかな光が注がれて、汁椀を手に一口啜る、利発な少年のような前髪の下で睫毛がふと震え、振り向いたのは甲姫と顔も姿も瓜二つ、年齢も同じの影の姫。澄んだ眼は弓の曳き手のそれと似て、はっと開く瞼と唇、けれども心静めた様子で椀を置き、自分の仕える姫君へ目をとめたまま、にじり向き直り、声は少し揺れ動きながら、いかなさったのですと影姫は訊いた。

甲姫は少しの間黙って「ないの、髪が」と口洩らした。部屋の間転がっているのは束ねられた簞と編みかけの竹籠。それから非常にゆっくりと、起きて鏡を見たらもうなかった、とぼつりぼつり言葉を重ねた。影姫は膳を退かせて立ち、下の押入から綿の薄い座布団を取り出し、床の間の前に穏やかに敷いて、どうぞこちらへお坐りくださいと囁き、自分は襖障子の脇に待つ

た。甲姫がにじり進んで座布団に這い上がるとすぐ影姫は軽く頭を下げて、入れ替わりに寢室へと出て襖障子を静かに閉じる。座布団の上に坐って甲姫は膝に目をやったまま、嗚咽する、片手で口をおおい瞼を閉じる。自分の身に降りかかったこの災厄も悲惨だけれどそれとは別に、何もできず何もわからずただ坐っているだけの自分自身が悲しく情けなくバカに思えて、取り乱さないでいる影姫を頼りに思いながらも、一方で小憎らしいような気持ちもした。何も載っていない文机と、食べかけの膳と、隅に転がっている数個の小ぶりの竹籠を眺めては、家従の誰かが庭を掃くの間遠に聴いて、物腰柔らかなお医者から、ああこれはよくあることです、この薬を飲んで三日もすれば元通りに治りますよ、と請け合われる光景を思い浮かべたり、空を飛んで遠い異国に行きたいな、などと童歌の世界に浸り込んでいたけれど、襖障子の音がして甲姫の空想を断った。影姫がそっと手について言う。敷布の上を見ましたが、抜けたものが一本も落ちておりません、まさか溶けてしまったというのでもないでしょう、変です。

六畳の隠れ間で向かい合い、文机の表に日の当たるのを何とはなしに眺めていると、二羽の雀が明かり障子の向こうの枝にとまり、頻りに鳴き交わして障子に二羽の影を騒がせ飛んでいった。影姫は簞を取り竹籠を編みだした。甲姫は物も言わずじっと坐っていた。文机に頬杖をして考えた。甲姫は浅いため息交じりに障子窓を見つめて、どうなるんだろう私と呟いた。影姫は竹籠を編む手を休めて、束の間ためらい、瞼を伏せて、これももし悪しき呪いでありますならば、おそらく甲姫様を恨んでのこと、ですから甲姫様はその者の顔をご存じかもしれません、と囁いた。甲姫は頬杖を解いたが肘を文机に載せたまま、

「私も影の言う通り、これは病気じゃないと思う。呪いって聞いてすぐに乙姫のことを連想したもの、あの人なら誰に何をしてもおかしくない」
熱に浮かされたように腕を交差し、倦怠と衰弱が睡眠へと誘うが甲姫はそれに抗って、

「しかも今日にかぎって歌の会の日だ。乙姫も多分来ると思う」

甲姫は腕の上に顎をのせて、けだるそうに言う、「でも、私、こんな頭で行けるわけない。みんなに見られたくない。何より御殿様のお耳に入ったら私は嫌われる。絶対に嫌われる。私、嫌われたくないよ。だめだ。行けない。無理だ。嫌われる。醜いと思われる。行きたくない」

腕の中に潜って甲姫は声なく肩を震わせる。影姫は音を立てず竹籠を取って編み始めた。日差しが畳を温める。その中で埃が浮遊する。わたくしは甲姫様を醜いとも思いませんし、嫌ったりもいたしません。

明かり障子から光を注がれて、禿頭の姫君は文机に俯せに少し顔を上げ、指で下唇を歯に押し当て撫でながら、どことはなしに意識はさまよう。鳴く雀。囀る雀。飛び去る雀。泳ぐ金魚。跳ねる金魚。漂う金魚。周遊する鯉の群れ。池は光を反射して、きらめく正午の淡水を巖の裾に巡らし流れる、浮かぶ若葉、回り流れる緑の葉、音なく沈む温かな葉。優しい土の温もりに砂利はますます乾いてゆく。

髻をおつけになればと影姫は不意に言う。都の外れ寒寺の食客に人知れぬ手わざの者がございます、その者に依頼すれば甲姫様の御髪そっくりの髻ができました、それをつけて御殿へお出でになれば、不断通りのお姿であちらの御方々とお会いできるはず。甲姫は赤く腫らした目を向けてじっと見たが、影姫は相変わらず竹籠編みの手を休めないでいる。甲姫はつと立って奥の間を出る、寢室を出る、邸のあちこちで音を立てているのは家従の女たち、女は水撒く、女は庭掃く、女は土間で炊事する。働く女たちの音を避け姫君は一人疾く疾く廊下を渡り去る。

市女笠を頭巾の上から被り、頭の後ろから全身をすっぽりと覆い尽くす壺装束を着込んで、甲姫は邸の裏から脱け出した。道の行く手から笠の女が近づくが、何事もなく通り過ぎる。後ろからは荷を担いだ男が甲姫を追い越してゆく。笠に半ば透けた垂れ衣をつけて五六人の女たちが笑いながら横手から出てくる。変装した甲姫は地を嘗めるように俯いて歩いた。石垣の角、竹

垣の通りの人の行き交いに目眩がし、砂塵が巻き上がり、咳をした。よく知る道ではあるけれど夢の中を歩いているような曖昧な心地がした。木橋の上をことごとと過ぎる、そのうつろに響く足音までもが知らない場所のもののように汗がじつとりと流れ出る。寒けがする。石畳の路の柳の下川べりに数人の子供が遊び、高い声で誰かの名を呼び、甲姫は通りの脇に並ぶ牛の尻の臭さに鼻をおおって足を速めた。

短い石の太鼓橋を渡りきってすぐの堀で、柳の枝を避けながら見下ろすと一匹の亀が水面に浮かんで、水を掻き、陸の石垣に頭を伸ばして、のぼるようなそぶりを見せる。甲姫は何とはなしに見つめ返した。けれどもすぐに亀は水中に戻って、またすいすいと向こうへ泳いで行ってしまった。

山桜の大通りに差しかかると、店が軒を争い、のれんを出したり幟を立てたりして、店の人と通りの人が話をしたり、歩き過ぎたり、そんなざわめきを後ろに、一頭の飴色の牛が漆塗りの車を曳いていて、数人の刀を帯びた男の従者に囲まれて行く。甲姫が黒いつやつやとした車を彩る金箔の絵飾りを見送るうちに、従者の一人が車の傍で何事か聞き、頷いて、一人の笠を被った坊主をこれこれと呼び止めた。牛飼いは牛の綱を引き、車は坊主を追い越して止まった。車の後ろの簾が上がり、現れた姫は無垢な幼な子のような眉目をして、繊細な少し波打つ髪を首もとに絡ませ、扇で唇を隠して微笑する。この女こそ血染めの剣、白い花の乙の姫君。

立ち止まった坊主は風体に似合わない、瑪瑙のようなきれいな数珠を握っている。乙姫は口もとの扇を斜めにずらして、甘い香り、蜜の吐息といわれる声で「これ坊主、ぬしの数珠は如何ほどか？ 買い受けようぞ」と囁いた。しかし坊主は笠を目深に被ったまま、大切なものですかとお譲りするわけには参りませんと言って立ち去ろうとする。これ、と乙姫は呼び止めて、「妾はただでくれとは言わぬ。買うと言うておるのじゃ」坊主は少し頭を下げて、さるお方から戴いた縁ある品であるからご免くださいと断る。「さてはぬし、値をつりあげようとしておるな」と乙姫は可愛げのある鼻を鳴らして冷ややかに笑う。今度は坊主も笠の下で低く笑って、では姫君はお幾ら

じやな値札を提げてくだされ、と皺だらけの目で乙姫を見上げた。乙姫は黙って見返したまま、臉を半ば下ろし、小さな潤んだ唇に扇を当て、「いまいましい坊主じゃ。斬りすてよ」とだけ、つまらなそうに言い置いて、簾を下げさせ、その場に従者を数人残して、桜の下を車に乗って去ってゆく。不遜な坊主は乙姫方のけちな差料の錆と果て、血溜まりと煙る地面に残る老いた首、目玉は遙か遠き楽土を見るや。

「続きは本誌で！」